

# 鶴来現代美術祭における地域と伝統

鷲田めるろ

## 1. はじめに

本論が対象とするのは、1991年より1999年まで石川県鶴来町（現白山市）で行われた「ヤン・フートIN鶴来」（1991年、94年）とそれを引き継ぐ「アートフェスティバルIN鶴来」（1995年-1999年）である。鶴来は金沢市中心部から車で約30分の距離にある町で、白山から日本海へと流れる手取川が、山間部を出て平野部へと差しかかる場所に位置する。名称の変更は、1995年以降フート自身が鶴来を訪れていないことによる。「鶴来現代美術祭」という名称が各回の事業名に使われたことは無いが、1997年に主催者が発行した報告書<sup>1)</sup>で両方をまとめて「鶴来現代美術祭」と称しているため、本論でもこれに倣うこととする。

本論が依拠する資料は主に、主催者であった鶴来現代美術祭実行委員会の中心となる鶴来商工会の保管資料、1991年の「ヤン・フートIN鶴来」のコーディネーター坂本善昭の保管資料ならびに関係者への聞き取りである。商工会保管資料は、1994年に関する文書資料と1994年から1996年までの記録写真約2000点および記録映像から構成される。1991年に関する資料は、記録映像を除いてほとんど残っていない。坂本善昭保管資料は、1991年に関する文書資料が中心である<sup>2)</sup>。

主催関係者による文献には、1997年に作成された前述の「報告書」がある。また、和多利志津子が「視覚の裏側」展のカタログに、フートとの出会いから「ヤン・フートIN鶴来」の開催に至る経緯を書いている<sup>3)</sup>ほか、フートの著書『アートはまだ始まったばかりだ』日本語版の訳者あとがきとして、池田裕行が1991年の回につい

て触れている<sup>4)</sup>。さらに、「水の波紋」展カタログに、全国8カ所の作品滞在制作場所の一つとして、鶴来現代美術祭が取り上げられている<sup>5)</sup>。

主催関係者が発行する文献以外には、橋本敏子『地域の力とアートエネルギー』がある<sup>6)</sup>。これは、1990年代前半に自治総合センターの委託を受けて全国のアートプロジェクトの調査を行い、それに独自の調査も加えて1997年に出版した書籍で、6事例のうちの1つとして鶴来現代美術祭を紹介している。ただし、橋本が調査したのは1995年の回である。もう一つは、『地域アート』と題された論文集の加治屋健司による論考である<sup>7)</sup>。加治屋は、フートの日本での活動の一つとして鶴来現代美術祭を取り上げ、野外美術展、パブリックアートとともに、日本におけるアートプロジェクトの源流の一つとして位置づけている。

以上のように、鶴来現代美術祭は、越後妻有アトリエンナーレなど特に2000年以降の日本で盛んになった地域のアートプロジェクトの先駆けとしての重要性を持つにもかかわらず、資料の保管や研究がこれまで十分に行われてきたとは言いがたい。本論は鶴来現代美術祭の基礎的な事実関係を跡づけること、その中で特に地域や伝統とグローバルな「現代美術」というシステムとが、どのように関係を結んだかを明らかにすることを目的とする。

## 2. 鶴来現代美術祭の誕生 (1986年-1991年)

フートが「シャンブル・ダミ」展を企画した1986年、гентを訪れた和多利志津子は、日本でも同

様の展覧会を行いたいと考え、同年、フートを日本に招聘した。和多利の考えは最終的に、1995年に東京の青山で行われた「水の波紋」展に結実するのだが、この当時は、まだそこまでの具体的なイメージはなかったという<sup>8)</sup>。フートの来日時、和多利は東京だけでなく、金沢、京都、名古屋を案内した。なお、この時点ではまだ鶴来は訪れていない。ヤンの金沢滞時に同行したのが、この後、「ヤン・フートIN鶴来」立ち上げのキーパーソンとなる坂本善昭である。坂本は、石川県を対象としたタウン誌『おあしず』の編集長であり、地域のことに詳しく、和多利は、金沢にも近い、富山県小矢部市の出身で、当時、金沢の玉川公園近くに町家を改修した「ワタリ・ミュージアム」を構えていた<sup>9)</sup>。そこでは、「現代美術と日本建築」「ナム・ジュン・パイクの音楽」（ともに1989年）などをテーマとしたセミナーが開催され、サロンのような場が形成されていた。そうしたなかで、和多利と坂本は出会ったようである<sup>10)</sup>。

一方、鶴来町では、同じく1986年より、鶴来商工会青年部が地域の資源調査を行っていた。その成果は1988年に報告書としてまとめられた。その後、その地域資源を活用すべく、当時発足したばかりの室内楽団「オーケストラ・アンサンブル金沢」を呼んで浄土真宗の寺院「別院」にてコンサートを行うなど、多彩な活動をしていた。その中でも際立っていたのが、白山比咩神社で行われた「姫神」のコンサートである。2000人以上の観客を集めたこのコンサートは、聞き取りを行った鶴来の人の多くが鮮明に記憶していた。

和多利は金沢周辺で「シャンブル・ダミ」のような町中での展覧会ができそうな場所を坂



1



2



3



4

本に尋ね、坂本は鶴来の町を挙げた。そして、1991年の「ヤン・フートIN鶴来」へと繋がってゆく。フートは、1990年に開館したワタリウム美術館の3回目の展覧会としてキュレーションした「視覚の裏側」展(1991年)のために来日した。これに合わせ「ヤン・フート氏の日本における現代美術一日大学」が開催された。一日大学の会場へと持ち込まれ、フートによって100点から選ばれた作品34点は、その夜のうちにトラックで鶴来へと運ばれ、翌日、旧町の町家などに展示された<sup>図1</sup>。

鶴来現代美術祭は、最初の3回は、フートやワタリウム美術館といったプロのキュレーターが関与したが、当初より主催したのは商工会で、会場探し、会場提供も行った。フートが率いるгент現代美術館が主催し、会場探しを行った「サンプル・ダム」展とは異なる、鶴来現代美術祭の特徴と言える。

### 3. 滞在制作と「水の波紋」展 (1994-1995年)

商工会には多様な職種の人たちが所属する。様々な素材や技術を用いる現代美術の制作には、このことが有効に働いた。最も活躍したのは鉄工所を営む目名保彦である。鶴来は、古代からの鉄の産地であった。山間部と平野部の境界に位置し、海岸沿いで採取した砂鉄を鶴来まで運び、山からの木を燃料として製鉄が行われた。町の名称ももともとは「剣」であり、鍛冶が多かったために火災も多く、縁起をかついで字を改めたものである。町の中心となる神社「金劔宮」も剣を祭っている。現在でも打刃

物を生産している。

1994年には、フートが選んだ3人の作家が滞在制作をした。そのうちの一人はカナダのトロント生まれのアーティスト、ロイデン・ラビノヴィッチである。フートが館長をつとめるгент現代美術館でも1984年に個展を行い、総合コミッショナーをつとめた1992年の「ドクメンタ9」にも出品している。鉄板を組み合わせた作品を制作しており、鶴来でも同様の作品を制作した<sup>図2</sup>。鶴来での作品についてラビノヴィッチは、日本の町並みをモチーフにしたと語っているが<sup>11</sup>、目名によると鶴来に来た当初から作品イメージは固まっていたという<sup>12</sup>。ラビノヴィッチの設計図に基づいて目名が制作し、一時的に「現代美術工房」と名付けられた小堀酒造の倉庫にて展示された。

二人目のビル・ウッドローはイギリスの作家である。トニー・クラッグやアニッシュ・カプーアなどととも1980年前後に活躍し始めた若手の彫刻家たち「ニュー・ブリティッシュ・スクール・プチュア」の一人と目されている。ウッドローも鉄を使った作品《ハーフ・カット》<sup>図3</sup>を制作した。鶴来の特産品である刃物の一つ、はさみをモチーフとして、それを巨大化したものである。はさみを真ん中で切断し再構成した形で、切る道具であるはさみ自体が切断されるというユーモアも含んでいる。鉄板にウッドローが手書きで形状を描き出し、それを目名が切断、溶接して、赤く塗装した。

木の加工も鶴来の伝統的な産業の一つである。ウッドローは、はさみをモチーフにした鉄の作品以外に、自らの頭部の彫像に目隠しをし、水槽のようなケースに入れた《セルフ・ポートレイトIN鶴来》<sup>図4</sup>も制作した。この頭部を木

1 「ヤン・フートIN鶴来」チラシ、1991年、坂本善昭蔵。  
Flyer of “Contemporary Art Tsurugi ‘91,” 1991,  
collection of Sakamoto Yoshiaki

2 ロイデン・ラビノヴィッチ《無題》、1994年。  
Royden Rabinowitch, *Untitled (Handed Operator Bundles Through 3 Axes Limited to Local Somatic Descriptions)*, 1994. Courtesy of Hakusan City.

3 ビル・ウッドロー《ハーフ・カット》、1994年。  
Bill Woodrow, *Half Cut*, 1994. Courtesy of Hakusan City.

4 ビル・ウッドロー《セルフ・ポートレイトIN鶴来》、1994年。  
Bill Woodrow, *Self Portrait in Tsurugi*, 1994.  
Courtesy of Hakusan City.

で制作したのが、知田善博である<sup>図5</sup>。知田の父が始めた知田工房は獅子頭を木彫りで制作や修理する工房で、加賀の獅子頭以外にも全国の獅子頭を手がけている。1989年に鶴来商工会青年部が鶴来の別院でアンサンブル金沢のコンサートを行った際、チラシに別院の外観をモチーフにした木版画の画像を使用することになり、その制作を知田が行っている。この時まで知田は、木版画は手がけたことが無かったが、商工会からの依頼で引き受けたと語っている。知田は彫刻家今英男のもとで7年間修行をし、また鶴来の現代美術作家角永和夫のアシスタントもつとめたことがあったため、西洋的な美術や現代美術にも抵抗はなかったという<sup>13</sup>。

他にも、毎年10月に鶴来で開催される「ほうらい祭り」のために制作される「造り物」の技法を使った作品もあった。1994年に滞在制作をしたフランツ・ヴェストは、鶴来へアシスタント2名を伴って来日し、《たんこぶ》<sup>図6</sup>、<sup>7</sup>と《耳栓》の



5



6



7

5 知田工房でのビル・ウッドロー（左から2人目）と知田善博（右端）、1994年9月。

Bill Woodrow and Chida Yoshihiro at Chida Studio.  
Reprint from "Ripple Across the Water," exh. cat.,  
1995, p. 324

6 フランツ・ヴェスト《たんこぶ》（制作途中）、1994年。

Franz West, *Kobu (Lump)*, work in progress, 1994.  
Courtesy of Tsurugi Society of Commerce and Industry.

7 フランツ・ヴェスト《たんこぶ》、1994年。

Franz West, *Kobu (Lump)*, 1994.  
Courtesy of Hakusan City.

2点を制作した。このうち《たんこぶ》は、竹を細く割り、それを曲げながら組み合わせて球体を作り、その上に金網とビニールを巻き、さらに吹き付けの塗装を重ねるといふ「造り物」と同じ技法で作られている。

翌1995年、オランダのピョートル・ミュラーは《手取川に沿って歩く（鶴来の人々に捧げる）》<sup>9</sup>と題した30メートルもの巨大な木のインスタレーションを制作した。材料の調達のために古い民家の解体現場に行き、また、多くの商工会メンバーが制作に携わった。

#### 4. アートストリートの盛衰（1995年-1998年）

1995年から「アートストリート」と題して、町家や社寺、公園や駅などを会場とした公募展が始まった<sup>9, 10</sup>。1998年まで4年間にわたって

行われたこのプログラムは、以後、アートフェスティバルの中心となってゆく。このプログラムを主導したのは商工会青年部側で、ワタリウム美術館側は関わっていない。滞在制作は小堀酒造倉庫内で行われ、完成後、街の各地にも展示されたとは言え、街全体に展覧会が広がるというわけでは無かった。商工会としては、1991年の「ヤン・フートIN鶴来」のように、古い町並みが残る旧町を舞台に展覧会を実施したいという思いがあり、「アートストリート」が始まった。1995年の参加者は、金沢美術工芸大学などを中心に27名であった。

ここに、作品の制作に力点を置くワタリウム美術館側と、古い町並みを活かした展覧会を重視する商工会側の間に目的のずれが顕在化している。1995年は、この二つの目的が、楯円の二つの中心のように相互補完的に両立し、最も成功した年であったと言える。

「水の波紋」展が終わった1996年以降、ワタリウム美術館、フートの関与は無くなり、商工会だけでアートフェスティバルは継続された。1996年は、滞在制作を引き継ぐものとして、ニューヨークの音楽家とダンサーのグループ、中馬芳子とスクール・オブ・ハードノックスによる「クラッシュオーケストラ」が開催された。アートストリートも1998年まで継続される。アートストリート2年目の1996年の特徴は、東京芸術大学の渡辺好明の参加である。学生とともに参加したことで、参加者の範囲がいっそう広がった。この経験は、1999年に渡辺が立ち上げの中心を担った取手アートプロジェクトなどにも影響を与えた可能性もある。

しかし、この企画はキュレーター不在の誰でも参加できる公募展であったため、次第に作品の質の維持に苦勞するようになり、1998年を最後として、1999年には5人の作家を選ぶ指名制となる。だがそれも芸術祭のマンネリ化とともに、旧町とそれ以外の地域の気持ちのずれもあって、終了を迎える。

#### 5. まとめ

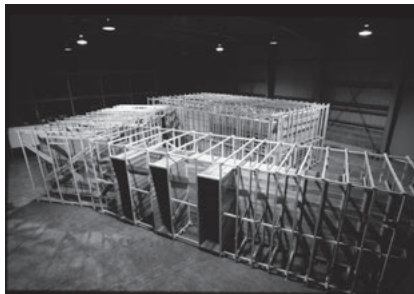
以上、鶴来現代美術祭の誕生から終了までを概観した。鶴来現代美術祭における「地域」は、二つの層が重なっている。一つは「旧町」である。本町から新町、今町へと続く道沿いには古い町並みが残り、萬歳楽の小堀酒造や菊姫などの造り酒屋、靴屋や醤油屋などが店を構える。古い町家の中で商品を製造し、他の地域へも広く販売もするが、同じ町家で店も構える自営業の人たちが商工会に加盟している。毎年10月に「ほうらい祭り」が行われる7町もこの地域である。

もう一つは、旧「鶴来町」という行政的地域である。2005年に近隣市町村と合併し白山市となったが、鶴来現代美術祭当時は、鶴来町という行政区だった。商工会に所属する中小企業は旧鶴来町全域に広がっている。例えば、1998年、99年に商工会青年部部長をつとめた北村明夫は、旧鶴来町の北部在住だが、金沢の百万石祭りも鶴来のほうらい祭りも、自分たちの地域にとっては同じくらい遠いという感覚だと語っている<sup>14</sup>。だが、旧鶴来町にあった高

校は鶴来高校のみであり、この高校の同級生や先輩後輩という関係は、旧町以外からほうらい祭りに参加するきっかけとなるほど、未だに地域の繋がりを生み出している。

一方、鶴来現代美術祭における伝統は大きく3つに分けられる。第一に旧町の古い町並み、第二に伝統的な産業技術、そして、第三に祭りである。鶴来現代美術祭の伝統との関わりは、1991年の回は町並みが中心であり、関連企画として行われたセミナーでも、「作品が建物に負けている」「作品が置かれることで、普段意識しなかった古い町並みの魅力に気づいた」などの感想が主流であった<sup>\*15</sup>。会場となった旧町の人たちにとっては、町並みという地域資源を再発見し、発信することができるというメリットがあった。一方、1994年の第2回目は、伝統的な産業技術が活かされた。だが、伝統的な技術を持った人たちは、街のためという理由で、無償で労力や素材を提供した。資金集めに奔走しながら限られた予算で「水の波紋」展を実現し、世界的な作家の力ある作品を日本で実現しようとしたワタリウム美術館の努力は評価できる。しかし、地域の伝統的技術との出会いが、滞在制作した作家の作品を変えたわけではない。一方で、例えば目名も「楽しかった。作家の作品に向かう真剣さはすごいと思った」と語っているものの<sup>\*16</sup>、海外の作家との出会いが伝統技術に新しい息吹を持ち込んだわけでもない。美術の振興のためというよりも、街のためという気持ちで協力した人たちにとって、制作後鶴来での展示があったとはいえ、中央に無償で労働力と技術を搾取されたという印象を残したことは否めない。1995年のミュラーの作品も大規模なインスタレーションで、その施工には、多くの労働力がつき込まれている。このことを可能とした背景には、祭りによる共同作業の蓄積がある。

7回の鶴来現代美術祭からは、二重の「地域」の間のずれや、3種類の「伝統」の重点の置き方を巡って試行錯誤した跡が読み取れる。地方の疲弊に対するカンフル剤として、地域と現代美術の協働によるアートプロジェクトが現在も盛んに行われているが、類似の課題を抱えている場合も多い。鶴来現代美術祭の記録を保存整理し、活用できるように公開することによって、その経験は今後の企画を構想する上で重要な示唆を与えるだろう。



8



9



10

8 ピョートル・ミュラー《手取川に沿って歩く  
(鶴来の人々に捧げる)》、1995年。

Piotr Müller, *A Walk Along the Tedoru River,  
(Dedicated to the People of Tsurugi)*, 1995.

Courtesy of Tsurugi Society of Commerce and Industry.

9 中島望《受感 Please hear this whisper》、辻家2階、1995年。

Nakashima Nozomu, *Please hear this whisper,  
Tsuji House*, 1995.

Courtesy of Tsurugi Society of Commerce and Industry.

10 岡部俊彦《コンセプトワーク—WEAVING A STORY》、金駒宮、1996年。

Okabe Toshihiko, *Concept Work: Weaving a Story,  
Kinkengu*, 1996.

Courtesy of Tsurugi Society of Commerce and Industry.

- \*1 鶴来現代美術祭実行委員会編『鶴来現代美術祭報告書』鶴来現代美術祭実行委員会、1997年
- \*2 2015年9月より2016年1月にかけて、金沢21世紀美術館はこれらの資料のリスト化とデジタル化を実施した。また筆者が行った関係者への聞き取りの記録映像は坂野充学が収録・編集を行った。それらは、金沢21世紀美術館アートライブラリーにて「鶴来現代美術祭アーカイブ」展(2016年1月30日-5月8日)として展示された。また、ワタリウム美術館に資料が残されていることを確認したが、本論執筆時点で未調査である。
- \*3 和多利志津子「現代美術に酔う。」「視覚の裏側」展カタログ、ワタリウム、1991年、12-13頁所収。
- \*4 池田裕行、訳者あとがき、『アートはまだ始まったばかりだ』イップレス、1992年、180-187頁所収。
- \*5 和多利志津子、大村理恵子編『水の波紋』展カタログ、オン・サンデーズ、1995年。
- \*6 橋本敏子『地域の力とアートエネルギー』学陽書房、1997年、59-74頁。
- \*7 加治屋健司「地域に展開する日本のアートプロジェクト」、藤田直哉編著『地域アート』堀之内出版、2016年、93-133頁所収。
- \*8 筆者による和多利志津子へのインタビュー、2015年10月11日。
- \*9 この建物は現在漆作家田中信行がアトリエとして使用。
- \*10 筆者による坂本善昭へのインタビュー、2015年10月5日。坂野充学制作・著作「坂本善昭インタビュー(鶴来現代美術祭アーカイブ)」、2016年。
- \*11 「ヤン・フォートの挑戦(筑紫哲也NEWS23)」TBSテレビ、1994年10月31日放映。
- \*12 筆者による目名保彦へのインタビュー、2015年10月6日。坂野充学制作・著作「目名保彦インタビュー(鶴来現代美術祭アーカイブ)」、2016年。
- \*13 筆者による知田善博へのインタビュー、2016年2月9日。坂野充学制作・著作「知田善博インタビュー(鶴来現代美術祭アーカイブ)」、2016年。
- \*14 筆者による北村明夫へのインタビュー、2015年9月16日。坂野充学制作・著作「北村明夫インタビュー(鶴来現代美術祭アーカイブ)」、2016年。
- \*15 萩原朔美、金森千栄子対談、「ヤン・フォートin鶴来」現代美術セミナーパートIII(対談)1991年6月9日。
- \*16 前掲の筆者による目名保彦へのインタビュー。

#### 鷲田めるろ(わした・めるろ)

金沢21世紀美術館キュレーター。1973年生まれ。東京大学大学院美術史学専攻修士課程修了。担当した企画で特に地域に関わるものに、アトリエ・ワン、島袋道浩、坂野充学の個展、「金沢アートプラットフォーム2008」[3.11以後の建築]などがある。アートプロジェクトに関する主な論考は「視点を生む、人をつなぐ」(『地域開発』521号、2008年)、「アートプロジェクトの政治学」(川口幸也編『展示の政治学』水声社、2009年)、「金沢アートプラットフォーム2008<金沢21世紀美術館>/CAAK」(熊倉純子監修『アートプロジェクト』水曜社、2014年)。